

**日本キリスト教会大阪北教会**  
**2017年4月30日 礼拝説教 牧師 森田幸男**  
**聖書 ヨハネによる福音書21章1節～14節**

21:01 その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。 21:02 シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。 21:03 シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。 21:04 既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。 21:05 イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。 21:06 イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。 21:07 イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。 21:08 ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキス(ペキス=45センチ)ばかりしか離れていなかったのである。 21:09 さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。 21:10 イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。 21:11 シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。 21:12 イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。 21:13 イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。 21:14 イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

**説教『舟の右側に網を打ちなさい』**

◆わたしたち生きておりますと、いつどこでどういうことに出会うか、分かりません。今日は礼拝後に久保淵さんご夫妻の弟さんの中村洋一さんの納骨式を行う予定でしたが、昨晚遅く久保淵博兄からお電話で、福井県にお住いの幸子姉のお兄さんが危篤だとの知らせが入ったので今から福井にまいります。明日お願いしておりました納骨式は日を改めてお願いいたしますとお電話でした。こういうこともあるのですね。

◆大分前からメールのやりとりをしている青年がいます。現在入退院を繰り返していますが、入院先から2～3行の短いメールが来ます。わたしも短い返事を返すのですが、先日、返事をするのが少し遅れると、すごいメールが来ました。「返事を早くよこせよ。…」と、強い調子の督促メールが来ました。そんな乱暴なメールは初めてでしたが、そんなやり取りを続けています。最近、段々と彼のことが具体的に分ってきました。16～7歳の頃に、いじめに合い、学校に行けなくなって、閉じこもり、今、37歳だということです。最近のメールでは、「もう一度10代の自分に戻れますか。もし戻れたら、一生懸命勉強して、身体も鍛えて、母を助けたい」とありました。「戻れます」と返信しました。

◆昨日の午後も一人の青年が訪ねて来ました。この人は31歳と書いていましたが、結婚する相手と昨日でダメになったと言うのです。二人の間はよかったのですが、両家の親が反対して別れることになった。お腹には2か月の赤ちゃんがいたけれど、昨日亡くなりましたと、泣いています。「二人がよければやり直すことできないの？」と聞きますと、もう駄目なんですと肩を落としています。それで聖書の中の色々な話をして、聖書中の人物は、当面あなたとは別人なんだけれど、みんなそれなりに試練、挫折を経験し、そしてもう一度光を見ることができた人たちの話ばかり書かれてあるからと、新約聖書を渡して、これを読んでくださいと言って別れたのです。

◆日曜学校の子供たちは子供たちで、新学期が始まったり、進学したりで、まだ一月も経っていないのですが、「誰かとケンカした人は？」と聞いてみますと、7人中4人が手を挙げました。中には先生とけんかしているという子もいました。生きて行くのは大人も子供も楽ではありませんね。

◆さて、今日の聖書ですが、イエス様が甦られて弟子たちに現われなさったのはこれで3度目だとあります。それで、漁師ペテロをはじめとして7人のイエスさまの弟子たちが、故郷のテベリアス湖・ガリラヤ湖へ帰ったときのことが記されています。復活されたイエス様が弟子たちの現れなさったのは、これで3度目ですが、しかし彼らは、復活の主イエス様の現臨、導きについて確信を持つ事ができなかったのです。かつて彼らがイエス様との衝撃的な出会いを経験したのも、このガリラヤ湖でした。一晩中の懸命の漁にもかかわらず、その日は何も取れなかったのです。するとイエス様は、「沖へ漕ぎ出して網を降ろして漁をしてみなさい」と言われました。今日の箇所では「舟の右側に網を打ちなさい」ですね。ガリラヤ湖の漁は夜です。夜が明けて漁をしても無駄です。魚がとれる道理がないと思ったけれど、イエス様の言われることを聞いて、沖へ漕ぎだし、網を打ってみると、驚くほど大漁でした。それで、ペテロをはじめ、数名の者が何もかも捨ててイエス様に従ったのです。

◆あれから今日の箇所までどれくらいの歳月を経たでしょうか。恐らく数年でしょう。そして今回もガリラヤ湖でペテロが「わたしは漁に行く」と言うと、ほかの者たちも「わたしたちも一緒に行こう」と舟をこぎ出しました。しかしこの夜も、何もとれませんでした。ところで、わたしは今日の箇所でも、聖書の記述は物凄く圧縮された表現になっていると、つくづく思いました。彼らは、ガリラヤの漁師だったのですが、イエス様に出会い、捕らえられて、何もかも捨てて、イエス様に従ったのです。それから数年後、弟子たちの誰一人思いもしなかったことですが、イエス様が十字架で死刑になって亡くなられたのです。彼らは完全に挫折しました。闇に突き落とされました。結局、彼らの居場所は、故郷のガリラヤしかありません。かれらにもそれぞれ親、兄弟、親戚もあるでしょう。しかし、今日の話からしますと、親、兄弟、親戚の所に戻ったという感じはしないですね。ガリラヤ湖畔にテントでも張って過ごしていたのではないのでしょうか。そして結局できることは、漁師しかないわけです。そしてペテロは、「わたしは漁に行く」と言い、他の仲間も、「わたしたちも一緒に行こう」と舟をこぎ出したのですが、この日も、何もとれませんでした。そういう次第がここに記されています。あの最初の不漁・大獵の日からの激動の日々が想起されます。

◆そうしますと岸の方から「子たちよ、何か食べるものがあるか」との声が聞こえます。すると彼らは「ありません」と答えます。するとまた岸の方から、「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」との声が聞こえたので、網を打ってみると、魚が一杯。153匹もの大きな魚がとれました。こういうことであります。7節以下

にこうあります。「イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、『主だ』と言った。シモン・ペトロは『主だ』と聞くと、裸同然だったので、上着をまとめて湖に飛び込んだ」と。「あの弟子」は、岸からの声が、親しく、聞き覚えのあるイエス様の声だと察知し、思わず「主だ」と叫んだのです。すると、「シモン・ペトロは、裸同然だったので、上着をまとめて湖に飛び込んだ」のです。

◆先週、わたしたちが読んだ箇所は、弟子のトマスの事でした。そこにはこうありました。20章24節以下です。「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いです。』」

◆ですから、よみがえられたイエス様は、生前と同じように、弟子たちと共にいて、その会話も、することなすこと全てを見て、聞いておられるわけです。そういう経験もして、今日が3度目の復活の主の顕現です。ペテロは裸でした。季節は春のことで、寒くはないにしても、もし、イエス様が眼前におられたら、ペテロも裸ではないでしょう。ですから2度目の顕現においてトマスに言われたことを、ペテロも聞いているのですが、それでも、弟子達は力が湧かず、傷心を抱えて故郷へ戻ったけれども元気が出ない。それで漁に出て、裸でいる。この様子を見ていますと、イエス様が何と言われようと、イエス様が、自分たちを御覧になってくださるという、この感覚は抜けていたと思います。だから裸なのです。皆さんも今日の日まで生きてこられて、色々な経験をされ、失意のどん底に陥るということを経験されていると思います。私も45歳位の頃、福島県の郡山で開拓伝道に携わっていましたが、晴れても曇っても雨が降っても、古い民家が牧師館でしたから、軒先に座って、出るのはただ溜息ばかりという日々がありました。

◆この前、新約聖書の第1ページの話をしていただきました。マリアとヨセフは婚約中ですが、ヨセフが知らない内に、マリアが身ごもったのです。それを知った婚約者ヨセフは、突如、どん底に突き落とされます。思い悩んで離縁しようとしたという事が新約聖書の第1ページに記されています。ヨセフはまだ二十歳になるかならないかの青年です。人生初の再起不能の試練です。旧約聖書の第1頁はどうでしょうか。こう記されています。「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面をうごいていた。」ここに、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり」と記されています。「そして神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった」と。今日の知見によれば、「宇宙はおおよそ138億年前に誕生した」という事です。一体、地が混沌とし、闇が深淵の面を覆っていた期間は、どれ位だったのでしょうか。138億年前が宇宙の始めとして、我々の人生もその中にあるのですが、「神が、『光あれ』と言われたら光があった」と。これが聖書第1頁の記事です。ですから宇宙も、歴史も、個人も、深い闇に閉ざされるという事を書いているのが聖書なのです。けれども、

その闇が如何に深く長く続くとしても、神様が「光あれ」と言われれば、闇が光に変わるのです。

◆闇に落ちたことのない人は一人もいません。そのような歴史の中にわたしたち各自の人生もあります。弟子たちが最初に召された時も一生懸命やったけれども1匹も取れなかった。そして、イエス様に従って数年後、十字架があり、イエス様の甦りと顕現があり、もう一度気を取り直すということもあって、わたしは漁に出ると言ってやってみるけれどダメだった、という話が今日の話です。しかし、そういう中でも、神様が「光あれ」と言われれば、闇が何十年続こうが、16、7歳で閉じこもり、それが20年続くとしても、解放の時は来るのです。ヨセフの場合も、かれは追い詰められて、離縁しようとした時、神様の御使いの介入があったのです。ですからわたしたちも、闇の時は、たとえどんなに続いて、神様の見ていてくださる中で、そのことが起こっているのだということを忘れないでいたいと思います。

◆実はペテロが最初ガリラヤ湖でイエス様に従った時、イエス様はこのように仰ったのでした。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と。イエス様はご自身が語られたことを覚えておられます。魚を捕ることは、またの機会に網を投げればできるかもしれません。しかし「人間をとる漁師になる」には、地獄の試練を経なければならぬのです。今朝の朝日新聞の『天声人語』にこんな言葉がありました。「失意の淵から再起する。」時満ちた時、人は必ず再起できるのです。

◆先日ある会合のために玉造のクリスチャンセンターに行きました。その隣に大阪女学院があります。その女学院の大きな門扉の上に聖書の言葉がラテン語で彫られています。日本語に訳すと、「真理はあなたがたを自由にする」という、ヨハネ福音書8章32節にあるイエス様の御言葉です。私達にも、悩みと失意の時はあります。しかしイエス様は言われます。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」と。イエス様の御言葉を真に受けることです。今いる足許に、可能性が満ちているのです。「153」という数字は当時知られていた魚の総数だそうです。イエス様の御言葉は、一言、一言が、恵みと真に満ちた御言葉なのです。

◆教会の入り口の定礎板に「ヤハウエ・イルエ」「主が備えてくださる」と刻まれています。「備える」とは「先を見る」という言葉です。その先のために、今・ここで、こうしなければいけないということを、神様は各自に相応しく課されます。神様はわたしたち一人一人の先をご覧になって、最善の導きをなして下さるのです。私達も色々なことがあります。すべては、「ヤハウエ・イルエ」です。世の中、大変な人が一杯です。聖書の福音が皆に届くように、召された私たち一人一人が人間を取る漁師になる事を志とせねばなりません。イエス様のご期待も、そこにあると思います。共にその道を歩んで行きたいと思えます。

◆お祈りいたします。恵みとまことに満ち給う主イエス・キリストの父なる神様。あなたの御思いは、お創りになった全ての者が、あなたの限りない祝福に与ることです。わたしたち一人一人が、正にその祝福、恵みの証人であります。どうか今、闇の中にある人たちを、あなたは顧みていて下さいますけれども、どうか一日も早く、あなたの光を見ることができるようにお導きください。この祈りイエス様の御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。